本実践・研究から見えてくること

研究協力者　細川　和仁

(秋田大学教育文化学部こども発達・特別支援講座)

総合的な学習の時間における“形成的”省察

2019 年度の総合的な学習の時間の取り組みに関わらせていただく中で, 自分なりに感じたことについて述べさせていただこうと思う。大まかには, ⑴ 子どもの省察の在り方について, ⑵ 総合的な学習の時間の授業研究について, の 2 点である。

１　子どもたちの省察の在り方について

総合の目標には「自ら課題を見付け, 自ら学び, 自ら考え, 主体的に判断し, よりよく問題を解決する」ことが謳われており, 附属小学校の研究の新重点である「自ら選択・決定する学習活動」の展開が, その目標に向けて非常に重要な鍵を握っていると言える。子どもたちは探究活動のそれぞれの場面で, 自分が追究する課題を選び, その解決に向けたアプローチを選び取り, またその選んだ結果としての学習活動を自己評価していく。探究活動の各場面で学習を振り返り, 判断する場面が, 学習過程の中に散りばめられていると言えるだろう。

そういった活動が, 子どもたちの学習における省察だと捉えるならば, 省察は学習活動の最後に「ふりかえる」だけではないことがわかる。その問題解決の過程のそれぞれにおいて, 子どもたちの省察ポイントがあると言える。学習評価における総括的評価と形成的評価の対比になぞらえるなら, “総括的”省察だけではない, 過程の中で探究活動の形を成していくための「“形成的”省察」(formative reflection) が重要だと言えるだろう。

では, 子どもたちの「形成的省察」が発現するために, 教師の側ではどのような仕掛けができるだろうか。そういう見方をすると, 今回の授業においても, 先生方による様々な仕掛けを垣間見ることができた。例えば, これから子どもたちがやろうとしている活動の「経験者」として, 同じ学年の他のクラスの児童にゲストとして参加してもらった場面。同学年の仲間からのアドバイスは, それだけでも子どもたちに響くものである。しかも, 既に経験している「先輩」である。経験に基づいた力強いアドバイスをもらえるような場面を設定していたのは, 授業者の先生方の仕掛けとして面白く, また効果的だったと言える。

これ以外にも, 先生方が子どもたちに直接に仕掛ける場面ー言葉がけによって子どもたちの省察が促される場面があった。しかし, 先生方からの言葉がけは, 参観者の我々には追い切れない部分もある。というのは, 総合の探究活動はグループ単位で行われている時間が長く, 授業者も動きながら各グループに言葉がけをしている。そういった拡散的な学習活動の状況において, 授業者がそれぞれの子どもに対してどのような言葉がけを行い, それが子どもたちにどのように伝わり, 省察が促されたかを参観者は知りたい。簡単なことではないが, 機器などの助けを借りながら, 授業者の仕掛けの具体を幅広く捉えることが, 研究として重要ではなかろうか。

授業者の仕掛けの具体を捉えることが重要, と書いたが, さらにもう一段先には, 仕掛けた上で何もせず, 子どもの反応を待っている, という局面もあるはずだ。子どもたちに省察が促され, 次に何か動きだそうとしている状況を, 授業者がどうみているか。参観者がパッと見てわからないところで, 授業者は, 子どもたちの学習状況を見取り, 判断し, 待機し, 次の仕掛けの選択, 意思決定を行っていると考える。まさに授業の過程の中での, 授業者の形成的省察の内実を, できれば参観者は知りたい。そこから学ぶものは非常に大きいと思うからだ。

２　総合的な学習の時間の授業研究について

一方, 今回の総合のオープン研修会は 2 月の開催であったが, すでに何ヶ月も前から授業についての構想が始まっており, 11 月には事前の検討会が行われていた。その時は, 準備がかなり早くから始まることにただただ驚いていたが, 今にして思えば, 年間計画の中でどのような内容が 2 月頃に位置づけられるのか, またどんな単元を構想するのか, それまでに必要な学習活動は何か。2 月に授業を公開するためというわけではなく, その頃にこのような授業をデザインするためには, どのような活動がそこまでに必要なのか, 逆算して授業が作り上げられていっていた。

総合的な学習の時間の特性から考えると, 1 つの単元が長期に渡る場合が多いことから,「オープン研修会」のその時間 (も, もちろん単体で魅力的で面白いのですが) だけでなく, その時間に至るまでにどのような「紆余曲折」があったかをたどることによって, 総合的な学習の時間の授業づくりのポイントや困難点が見えてくるのではないかと思われた。

このことは他の教科, 領域にもあてはまることではあるが, 総合的な学習の時間の場合, 特に強調されて良い点だと考える。授業公開とその協議という短い時間の中で検討できることは限られている。それはそれで重要で, その時間の中での授業状況の認知, 判断, 意思決定から, 学ぶことは多い。それにも増して, その時間が成立するに至る過程の中での子どもの学習状況の認知, 判断, 意思決定は, 総合的な学習の時間の授業デザインを考察する上で重要性を持っている。

西之園 (1981) は, 授業設計を「教材内容, 学習環境, 教師の行動などによってもたらされる効果を予測しながら, 自らの教授行動を立案していくこと, すなわち仮説を形成していくことでもある。」と述べている。授業に関わる様々な要素の, 個々の子どもにとっての学習効果を予測する中で, 教師は実践的な仮説を形成していく。総合の単元設計において, どのような予測をし, 仮説をたてたか, またその仮説は過程の中で修正されるものでもあると思われるので, どのように修正されたか。そういった長いスパンでの授業設計研究が今後求められると感じている。

(参考文献：　西之園晴夫『授業の過程』, 第一法規出版, 1981 年)